

2020 年 9 月 13 日（日）「誓いと信頼関係 ～礼拝の心得〔その 3〕～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:17-5:6

4:17 神殿に行くときには、足に気をつけなさい。聞き従おうと神殿に近づくほうが、愚かな者がいけにえを献げるよりもよい。彼らは知らずに悪事に染まるからだ。

5:1 神の前に言葉を注ぎ出そうと、焦って口を開いたり、心をせかしたりするな。神は天におられ、あなたは地上にいるからだ。言葉を控えよ。

2 仕事が増えれば夢を見、言葉が増せば愚かな者の声になる。

3 神に誓いを立てたら、果たすのを遅らせるな。愚かな者は喜ばれない。誓いを立てたことは果たせ。

4 誓いを立てて果たさないなら、誓いを立てないほうがよい。

5 口によって身に罪を負うことのないようにせよ。使いの者の前で「あれは過ちだった」と言ってはならない。神がその声に怒り、あなたの手の業を滅ぼして、なぜよいだろうか。

6 夢が多ければ、ますます空しくなり、言葉も多くなる。神を畏れよ。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:1-7

1 神の宮へ行くときは、自分の足に気をつけよ。近くに行って聞くことは、愚かな者たちがいけにえを献げるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行っていることを知らないからだ。

2 神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。

3 仕事が多ければ夢を見、ことばが多ければ愚かな者の声となる。

4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。愚かな者は喜ばれない。誓ったことは果たせ。

5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。

6 あなたの口が、あなた自身を罪に陥らせないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ」と言ってはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。

7 夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。

【序論】

5 章に入ってから 3 回に亘って「礼拝の心得」について語らせていただいております。これまでの 2 回を振り返りますと、1 回目が「いけにえ」について（4:17）、2 回目が「祈り」について（5:1）でした。そして、3 回目は「誓い」について（5:2-6）となり

ます。いずれも安易な態度で神にささげることが戒められています。

私たちの日常において、「誓い」というのはどういうときに立てるものでしょうか。すぐに思い浮かぶのは、結婚におけるパートナーに対する誓いではないかと思います。生涯に亘ってこの人だけを愛すると。キリスト教においては、これを「神と人の前」での誓いとしますので、二重の重みを持ちます。しかし、近年は「人前結婚式」というものも一般的に行なわれていて、キリスト教式が身についている者としては、「神」抜きに行なわれる結婚式にどうしても物足りなさを覚えざるを得ません。これも日本人の宗教離れの一側面と言えるのかもしれませんが、「見える相手」だけではなく「見えない存在」の前でも誠実であろうとする姿勢が「誓い」の本質ではないか。いずれにせよ、人が人と交わす誓いも、ことごとく神はご存知で、その誓いが守り通されることを求めています。

【本論】

本論 1. 夢と誓いの取引

仕事が増えれば夢を見、言葉が増せば愚かな者の声になる。(5:2)

まず「仕事が増えれば夢を見る」という表現が何を意味しているのかを考えてみましょう。日本語でも英語でも「夢」と言うとき、二つの事柄が思い浮かびます。第一に、私たちが眠っている間に見る夢、潜在意識が映像や音声を伴って現れるものです。第二に、私たちが将来実現したいと願うビジョンのことも「夢」と呼びます。英語でも、どちらも「dream」であり、判別が難しい。2節で言われているのはどちらのことなのか。おそらく、ここでは後者のことが言われているでしょう。ハードワークで忙殺されている人は、将来の夢を多く語るという意味のようです。なぜ忙殺されると夢を語るのか。そこにはどんな因果関係があるのか。それはおそらく、ハードワークで疲れ、物事を余裕をもって見られなくなると、現実離れしたことをあれこれ考え、語り出すということなのでしょう。そして、そのような状態の人が祈る言葉は、「あれを実現させてください」「これも叶えてください」という「夢の達成」ばかりを求めるものになりがちだということだと思われます。

実際、自分はどうかを考えさせられます。私も達成したいことが多くあり、そのための努力もしていないわけではありません。自分がどんなときに、「あれもこれも叶えてください」という「祈り」をささげているかを振り返ってみるときに、それは神に集中していない時ではないかという一つの気づきが与えられました。「神の御心を実

現していくための人生」という見方ではなく、「自分のやりたいことを実現していく人生」へと方向が変わってきてしまっているかもしれないのです。神の国とその義を第一とすると、必要なものはすべて与えられると言われています(マタイ 6:33)。しかし、神に集中できていない時、必要なものを自分の力で得ようとしているのかもしれませんが。そのような状態でささげる祈りは、自分の願い事が中心になっており、神の栄光のために生きるという姿勢が欠落している危険性があります。コヘレトがここで言わんとしているのは、おそらくそういうことでしょう。そして、彼が言う「愚かな者」は、自分の夢を実現するために、神と取引をするのです。「この夢を叶えてくださった暁には、必ずこれこれのものをおささげします」と。旧約聖書において、誓願を立てること自体は否定されておらず、実際に自分の願いを受け入れていただくために誓願を立てて叶えられた人々が登場します。

- ・ ヤコブは誓いを立てて言った。「神が私と共におられ、私の行く道を守り、食べる物、着る物を与えてくださり、私が無事、父の家に帰ることができ、そして主が私の神となられるなら、その時、柱として私が据えたこの石は神の家となるでしょう。そこで私は、あなたが与えてくださるすべてのものの十分の一をあなたに献げます。」(創世記 28:20-22)
- ・ エフタは主に誓願を立てて言った。「もし、あなたがアンモン人を私の手に渡されるなら、アンモン人のもとから無事に帰ったときに、私の家の戸口から迎えに出て来る者を主のものとし、その者を焼き尽くすいけにえとして献げます。」(士師 11:30-31)
- ・ そして、誓いを立てて言った。「万軍の主よ、どうかあなたの仕え女の苦しみを御覧ください。この仕え女を心に留めてお忘れにならず、男の子を賜りますならば、その子を一生主にお献げし、その頭にはかみそりを当てません。」(I サムエル 1:11)

誓願とはあくまでも人間側の自発的な行為であり(民数 6:1-21、15:1-10)、神にそうせよと言われたからするものではありません。本質的に、これは「取引」ではなく、信仰をもって神に願い、それが叶えられた暁には感謝と献身のしるしとして自分の大切なものをささげるという約束です。また、もし叶えられなかったとしても、それを御心として受け入れるという類のものでしょう。しかし、中には願いが叶えられたにも拘らず、後になって惜しくなり、誓いを果たさない人もいたようです。

本論 2. 誓いは果たせ

神に誓いを立てたら、果たすのを遅らせるな。愚かな者は喜ばれない。誓いを立てたことは果たせ。(5:3)

誓いに伴うささげものとは、欠陥のない雄の牛や羊や山羊が中心だったようです(レビ

22:18-19)。そのささげものはよく吟味され、傷があったり、変形していたりするものであってはならないと厳しく戒められています。それは神への心からの感謝として表されなければならないからです。本来それは神が命じる類のものではなく、人が自ら進んで選択すべき「最上のもの」であるはずですが、私たち人間は見えぬ方に対して出し惜しみをする誘惑に晒されやすいので、神は誓願の規定を設けられたのです。イスラエル人がささげる家畜は彼らにとってまさしく「財産」であり、私たちにとってはお金に等しいでしょう。

誓いを立てて果たさないなら、誓いを立てないほうがよい。(5:4)

先にも申しあげましたように、誓いとは神に強制されるものではなく、人間側の自発的な行為です（誓願とは、願いが叶ったときに何を献げるかを明確にして誓うこと）。もし誓いを果たせないようなことになるくらいなら、最初から誓いを立てない方がよいと言われます。これは当然のことですが、人間が陥りやすい過ちだからこそ釘が刺さるのです。人と人との間のことであれ、約束したことが果たされないのであれば、それはどんなに小さな事柄であっても、同質の罪として問われるでしょう。主イエスの時代には、安易に誓いが立てられ、更にその誓いを果たさずにすむ抜け道まで規定として用意されていましたから、そのような不誠実な態度を主は厳しく戒められました。

また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、「偽りの誓いを立てるな。誓ったことは主に果たせ」と言われている。しかし、私は言うておく。一切誓ってはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは偉大な王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、悪から生じるのだ。(マタイ 5:33-37)

「愚かな者は喜ばれない」というフレーズは、「愚かな者には喜びなし」とも訳せます。本来「喜び」という言葉 (יְשִׁיעַ) は名詞です。誓いを果たしていない状態というのは、その人本人からも神との交わりの喜びを取り去ってしまう。なぜなら、神に対して「果たしていない」負い目を常に抱えていることになるからです。

本論 3. 誓いを取り消すな

口によって身に罪を負うことのないようにせよ。使いの者の前で「あれは過ちだった」と言うてはならない。神がその声に怒り、あなたの手の業を滅ぼして、なぜよいだろうか。(5:5)
「口によって身に罪を負う」と言われているように、私たちは言葉において罪を犯しや

すい存在であることを心に留めておきたい。嘘をつくことはもちろんのこと、今日とはりわけ「言ったことをやらない」罪が戒められています。私たちは真に価値のあるものとは何であるかをよくよく考える必要がある。約束を果たすことは、お金では測ることのできない価値があります。それは相手の信頼を得る鍵であり、小さなことに忠実な人は喜ばれるのです。詩篇にこういう聖句があります。

主よ。だれが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。正しく歩み、義を行い、心の中の真実を語る人。その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行わず、隣人への非難を口にしない。神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。（詩篇15:1-4／新改訳第三版）

たとえ自分にとって不利益になるような状況であっても、約束を果たすことを優先する人は神に喜ばれると言われています。神と人との関係も「友情」で結ばれているものと考えれば、人は神の信頼を裏切るようなことをしてはならないでしょう。神は見えない存在であるから侮られやすいのですが、最も侮ってはならない方なのです。

5節に「**使いの者**」という表現が出てきます。これは誰を指すのか。聖書の中に証拠を見つけることはできないのですが、コヘレトの時代には公的な誓いを全うしていない人々を調べ上げるのを生業としていた「宗教上の取立人」のような人がいたようです。おそらく、祭司のような立場の人であり（マラキ 2:7）、誓いを果たしていない人々の家を一軒一軒訪ねて、「ちょっとちょっと、神に対するこの約束はどうなりましたか？」と問うていたのでしょう。まるで借金取りのようで、人々からは煙たがられるのですが、そのように指摘してくれる人がいるのは幸いなことです。その人が訪ねてきたときに、「**あれは過ちだった**」と言い訳をしてはいけなと言われる。迅速に約束を履行する必要があります。そして、神に対して「遅れてまことに申し訳ありませんでした」と祈るべきでしょう。それは自分が「やる」と誓ったものであり、神の側には何の責任もないからです。

「**神がその声に怒り、あなたの手の業を滅ぼして、なぜよいだろうか**」とはどういうことか。これはおそらく、神が誓願に応じて実現に至らせてくださったものが、再び失われるということでしょう。それは瞬時のことではないかもしれませんが、「良い仕事」として残っていかないということだと思われます。

夢が多ければ、ますます空しくなり、言葉も多くなる。神を畏れよ。（5:6）

ここは訳が難解な箇所、様々な提案があります。重要なのはポイントであり、文脈で捉えていくと、ここでは礼拝者が夢（幻想）の中で神に対して安易な約束事をしないようにと戒めています。神はすべてを聞いておられ、忘れることのない方である。畏れをもって言葉を発しなさいと。

【結論】

今日の箇所は、私を含め、読者にとって厳しい御言葉でした。まだ果たされていない約束があるのであれば、それは一つひとつ果たしていくことが大切でしょう。それは、私たちの心を軽くしていく作業となります。また、神との間に友情と信頼関係が築かれていくものとなるのです。真に価値あるものは地上の宝ではなく、神と人との信頼関係であることを、深い真理をもって教えてくれている箇所です。それを大切にしていくなき、神は溢れるばかりの良いもので私たちの人生を満たしてくださるでしょう。自分の意識がどこに向いているか、今一度確認してみたいと思います。

【祈り】

ロゴスなる神よ。あなたが語られたことはすべて実現します。しかし、人間の語ったことは多くが実現していないのが現実です。そこに罪があり、それは人格と人格の信頼を壊します。特に、私たちが神に対して誓って果たしていないことがありましたら、どうぞそれをお示しくださり、あなたとの関係を阻んでいるものを取り除けていただくことができますように。また、私たちが人に対しても忠実であることができるようにお導きください。どんなに小さな約束でも、果たしていく勇気と誠実さを与えてください。そのところに真の喜びと、多くの関係の回復を見出させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
すべてにおいて言葉と行為が一致し、民との約束を果たし給う、父なる神の愛、
旧約預言をことごとく成就するため、世に降り給うた、神のロゴス、主イエス・キリストの恵み、
神に対しても、人に対しても、誠実であらせ、あらゆるところに信頼の回復を得させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。